

5. 大学院・看護学研究科

5.1 理念・目標

5.1.1 博士前期課程（修士）

5.1.1.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.1.2 教育目標

1. 看護教育を支える教育・研究職の育成

本課程では、学部で蓄積された看護学に関する成果を、さらに深化・発展させることによって時代と地域の要請に応えるため、看護学分野における学術上の先端的役割を担うとともに、知識の体系化と看護技術の開発を積極的に推進し、看護学の学問体系の構築に貢献する教育・研究職の人材を育成する。

2. 高度な専門的知識・技術・実践能力を備えた看護職者の育成

実践現場において当面する種々の問題について、体系的、継続的に研究を行い、合理的に問題解決できる人材や、看護職に対する指導・相談、関係する職種間の総合的調整能力、ケアの環境条件を積極的に改革していく役割を担う人材の養成が求められている。そうした要請に応えるため、専門看護師（CNS:Certified Nurse Specialist）の養成を図り、もって地域の看護の発展に一層寄与できる高度専門職業人を育成する。

3. 生涯にわたって研鑽できる看護職の知的交流の場づくり

日々進歩・発展する医療技術と看護環境の変化に機敏に対応し、看護の知識と技術の向上を図るため、看護の実践現場と教育・研究の場の交流を活発にし、地域が要望する質の高い看護サービスの提供を図っていく。そのためには、学部の社会人入学に加えて、卒業後の継続教育、適宜適切な社会人の再教育の場を提供する必要がある。本課程は、このような向上心旺盛な学部卒業生や社会人の受け皿としての機能を持ち、看護現場のより一層の質の向上のために寄与することを目指す。

5.1.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 幅広い基礎学力を有し、かつ希望する専攻分野の基礎知識を有する人

2. 看護の専門的知識・実践力と研究能力を自ら発展させる意志を有する人
3. 人間や社会に対して広く興味を持ち、豊かな人間性と高い倫理観を有する人
4. 看護学を通じて地域社会および国際社会に貢献する意志を有する人

5.1.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士前期課程では、学際的で深い科学的知識と高い研究能力を有し看護学の研究や教育、実践に携わることのできる研究者・教育者・高度看護実践者を育成するために、研究コースと専門看護師コースを設け、次のような教育課程を編成している。

1. 広い視野で看護を学ぶための学際的な科目から構成されている「共通科目A」「共通科目B」各研究教育分野におけるより深い専門性を学ぶ「看護専門科目」を置いている。
「共通科目A」は研究コース・専門看護師コースのどちらの学生でも履修できるように配置している。
2. 論文作成にあたっては、中間報告会などにより研究プロセスを段階的に学んでいくことができるように、全学的な指導体制をとっている。
3. 専門看護師コースでは、特定分野におけるケアとキュアを融合した看護実践力、保健医療福祉チーム内の調整力などの育成をめざし、看護実践力の高い専門看護師とタイアップして日本看護系大学協議会で認定された専門看護師教育を展開している。
4. 国際的な視野をもち、より効果的な看護を探求し提供していくために、海外の招聘教員による国際看護を学ぶ科目を置いている。

5.1.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、学際的で深い科学的知識と高い研究能力・実践能力を有する者に修士（看護学）の学位を授与する。そのためには、以下の学習成果をあげることが求められる。

1. 各分野における修士論文の作成を通して、体系的な研究方法を身に付ける。
2. 専門看護師コースの修了者は、特定の看護分野における高度な知識と技術を身に付ける。
さらに、総合的な判断力をもって組織的に問題解決をはかる能力を身に付ける。

5.1.2 博士後期課程（博士）

5.1.2.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.2.2 教育目標

1. 看護学や看護実践の発展に寄与する教育者・研究者の育成

看護・保健・医療・福祉を取り巻く環境の変化や地域の要請に対応することができる高度で専門的な知識・技術と、総合的判断力、リーダーシップを備えた看護職を養成する。また、これまで蓄積された経験知や実践知に基づいてより効果的な看護ケアプログラムを開発していくとともに、健康に関する人々の反応や看護援助にまつわる専門的知識を系統的に理解し、諸科学の知見と関わらせながら看護学をさらに体系化し、かつ現代社会の変化や趨勢に照らして看護が果たすべき役割を発展的、科学的、体系的かつ原理的に探求していくことができる教育者・研究者を育成する。

2. 科学的な理解に基づいて看護をデザインできる研究者の育成

地域社会並びにそこで生活するあらゆる健康レベルの人々やその家族に対して総合的なヘルスケアをデザインするために、高度な理論・方法など学際的な知識体系を修得・活用して新しい看護実践方法、環境、用具等の開発を行なう。さらに、それらの実践の場における有用性の検証を図り、実践に活かせるエビデンスを明らかにできる研究者を育成する。

3. 対象の特性を踏まえた看護を実践できる研究者の育成

効果的な看護ケアプログラムの開発、あるいは対象者個々の個別性を踏まえ、その人たちが帰属する地域の文化的特性を踏まえた看護援助の開発、エビデンスに基づいた看護援助法の確立をめざした高度の研究を継続的に推進していくことのできる研究者を育成する。

5.1.2.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 幅広い基礎学力を有し、かつ希望する専攻分野の基礎知識を有する人
2. 看護の専門的知識・実践力と研究能力を自ら発展させる意志を有する人
3. 人間や社会に対して広く興味を持ち、豊かな人間性と高い倫理観を有する人
4. 看護学を通じて地域社会および国際社会に貢献する意志を有する人

5.1.2.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士後期課程では、看護学や看護実践の発展に寄与する研究者・教育者を育成するために、教育課程においては次のような点を重視している。

1. 広い視野で看護をとらえ、看護プログラムなどをデザインし発展させる能力、看護実践のもととなる原理を解明する能力を身につけるために、組織的な研究指導をする。
2. 学位論文の審査にあたっては、他の大学院等の教員を審査委員に加える等、論文の質の向上と客観性の確保に努める。

5.1.2.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、学位論文において新しい知見を産出して、看護学や看護実践の発展に寄与する研究能力を有する者に博士(看護学)の学位を授与する。

5.2 大学院生の入学・在学・修了の状況

1. 入学の状況

1) 入学定員・収容定員

課 程	単位 (人)	
	入学定員	収容定員
博士前期課程	10	20
博士後期課程	3	9

2) 試験実施日

	実施日
博士前期課程入学試験	平成26年 9月20日 (土)
博士前期課程入学試験 (第2次募集)	平成27年 1月31日 (土)
博士後期課程入学試験	平成27年 1月31日 (土)

3) 受験状況等

課 程	単位 (人、倍)							
	募集定員 A	志願者数 B	志願倍率 B/A	受験者数 C	受験倍率 C/A	合格者数 D	実質倍率 C/D	入学者数
博士前期課程	10	7	0.7	7	0.7	7	1.0	7 (7)
博士前期課程2次	若干名	3	-	3	-	3	1.0	3 (3)
博士後期課程	3	2	0.7	2	0.7	1	2.0	0 (0)

() の数字は内数であり女性の数を示す

2. 在学の状況 (平成 27 年 3 月 1 日現在)

課 程	単位 (人)		
	1 年次	2 年次	計
博士前期課程	10 (10)	16 (12)	26 (22)

課 程	1 年次	2 年次	3 年次	計
	博士後期課程	4 (4)	3 (3)	8 (7)

() の数字は内数であり女性の数を示す

3. 修了の状況

1) 修了者数と修了後の進路状況 (平成27年3月31日現在)

課 程	単位 (人)	
	修了者数	修了後の進路
博士前期課程第 10 期生	9 (6)	医療機関、教育機関
博士後期課程第 10 期生	3 (3)	教育機関

() の数字は内数であり女性の数を示す

2) 修了後の進路状況 第10期生 (平成27年3月31日現在)

(1) 博士前期課程

単位 (人)

区 分		県内 人数	県外 人数	合計 人数
就 職	医 療 機 関	4	0	4(2)
	研 究 機 関	0	0	0(0)
	教 育 機 関	4	0	4(4)
	保 健・福 祉 機 関	1	0	1(0)
合 計		9	0	9(6)

() の数字は内数であり女性の数を示す

単位 (人)

区 分		県内 人数	県外 人数	合計 人数
進 学	大学院博士後期課程	0	1	1(0)
	そ の 他	0	0	0(0)
合 計		0	1	1(0)

() の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 博士後期課程

単位 (人)

区 分		県内 人数	県外 人数	合計 人数
就 職	医 療 機 関	0	0	0(0)
	研 究 機 関	0	0	0(0)
	教 育 機 関	2	1	3(3)
	保 健・福 祉 機 関	0	0	0(0)
計		2	1	3(3)

() の数字は内数であり女性の数を示す

5.3 大学院教務学生委員会

委員長：吉田和枝 教授(研究科長)

委員：丸岡教授、大木教授、牧野教授、西村教授、小林教授

事務局：入道教務学生課長、井ノ山事務員

活動内容：

1. 大学院教務に関する以下の事項について審議・実施し、必要事項は研究科委員会に提出し、承認を得て教務を行った。
 - 1) 新入生および在校生へのガイダンス
 - 2) 修士論文・博士論文に関し、修士（9名）の中間評価委員・博士論文（4名）の予備審査委員決定、修士中間報告会（9名発表.参加者69名）、修士論文発表会（9名発表.参加者81名）、博士中間報告会実施（3名発表.64名参加）を行った。
 - 3) 既修得単位、14条学生、長期履修生、科目等履修生、研究生、休学・復学の認定
 - 4) 前期・後期成績判定、学位授与・修了判定を行った。
 - 5) 非常勤講師、院内講義担当者の、実習施設に関する事項の申請を受けて検討した。
 - 6) 時間割の作成、大学院便覧の作成を実施した。
2. 9月6～20日ワシントン大学のノエル・クリスマン教授を招聘し大学院講義を行った。
3. 「院生との懇談会（9月、2月）」開催、院生のニーズの把握に努め、連絡徹底、必要物品購入、早期の時間割作成など対応をした。また、大学院生の個別の連絡先表の作成することの許可を学生から得た。
4. 専門看護師の受験・実習場所拡大を目的に、昨年に続き3回目の「北陸3県看護部長との懇談会」を実施し、16名の看護部長の参加のもとに意見交換をした。
5. 小児の専門看護師38単位カリキュラム申請が承認され平成27年度から実施となった。
6. 北陸がんプロインテンシブコースAの講義で3P科目の聴講も可能となった。ただし3P科目については現在のところ、聴講のみで単位取得はない。
7. 大学院のあり方検討WG、学長の発案を受けて、大学院での英語看護論文購読の新規開設科目について委員会で話し合われた。その後、研究科委員会での議論では拙速とのことで再履修単位の確認をまずは学生が自己責任の下で確実にを行うこと、教員はシラバスや単位の説明などを初期にきちんと学生に説明することなど、履修漏れ予防を徹底することが再確認された。

5.4 平成26年度 修士論文題目一覧

分野	氏名	論文題目	担当教員
コミュニティケア	井上 智可	訪問看護師の精神科医師と連携するための看護実践	林 一美
コミュニティケア	角地 孝洋	中堅期保健師の職業的アイデンティティに影響する要因	石垣 和子
コミュニティケア	金子 紀子	幼児を育てる母親の近所とのつながりと育児ストレス、育児マスターリー	石垣 和子
成人看護学	南堀 直之	安静降圧療法を受ける急性大動脈解離患者に対する看護実践の構造	村井 嘉子
成人看護学	原子 裕子	抗EGFR抗体薬投与中の患者への看護師によるスキンケア指導の効果 ーセツキシマブ投与中のがん患者を対象にー	牧野 智恵
地域・精神・保健学	中嶋 知世	石川県の外国人住民における健康課題の実践調査	大木 秀一
看護管理学	辻 清美	終末期がん患者の退院支援に対する看護師の姿勢と行動 ー緩和ケア病棟の看護師に焦点をあててー	丸岡 直子
看護管理学	松井 康一	医療安全管理者の業務遂行上の負担感と影響要因 ー医療安全に関する職員研修に焦点をあててー	丸岡 直子
老年看護学	磯 光江	血液透析を受ける認知症高齢者に対する看護師の経験の質的研究	高山 成子

5.5 平成26年度 博士論文題目一覧

氏名	論文題目	担当教員
岩城 直子	外来で放射線療法を受けるがん患者への精神心理的援助 ーPILテストを手がかりとした対話による看護介入の効果ー	牧野 智恵
永谷 幸子	Increasing cerebral oxyhemoglobin by ankle exercise: An attempt preventing symptoms of orthostatic hypotension (足関節運動による脳内酸素化ヘモグロビンの増加：起立性低血圧を予防するための試み)	丸岡 直子
林 静子	看護師の視覚を用いた観察に基づく臨床判断の構造	丸岡 直子